

宮本雅弘
風狂の
旅人
ある無名画家の
隠された青春



風狂の旅人

ある無名画家の
隠された青春

宮本雅弘

河出書房新社

風狂の旅人

ある無名画家の隠された青春

宮本雅弘

初版印刷 一九九四年九月一〇日
初版発行 一九九四年九月二〇日

発行所 河出書房新社

発行人 清水 勝

東京都渋谷区千駄ヶ谷二・二三・二
TEL (三三〇四) 八六一一 (編集)
(三三〇四) 一一〇一 (営業)
振替〇〇一〇〇七・一〇八〇二

印刷 大日本印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

装幀 洪川育由

© 1994 Printed in Japan
定価はカバー・帯に表示しております
落丁・乱丁本はお取替えいたします
ISBN 4-309-00936-0

宮本雅弘 (みやもと・まさひろ)

一九三四年、東京に生まれる。武蔵野美術学校西洋画科卒業後、一九六〇年よりフォト・レポーターとして世界約六十カ国を取材旅行。一九八一年から八六年まで画家としてパリに滞在。著書に『ステンドグラス・大衆信仰を輝きに凝縮させた職人たち』(美術出版社)、『オーナメント二〇〇〇』(学研)、『フランス金箔刻印文様事典』(河出書房新社)等。連絡先・東京都日野市百草一二五八・一四コーポ高橋二〇二
電話 (〇四二五) 九四・三五四二

目次

プロローグ 5

第一章 圧縮された寒気の中の旅 14

第二章 抹殺してしまった友 27

第三章 プロヴァンスの風 49

第四章 ラテンアメリカとポーランドの悔恨 68

第五章 山間村落から始まった記憶 92

第六章 即是空・そくぜいくーくと山鳩は鳴く

第七章 十久一の生いたち 143

第八章 塗り込められた青春の蹉跎 172

第九章 失恋 192

第十章 姉の死・天を焦がす劫火 213

第十一章 四国路巡礼の旅 235

第十二章 風狂雑記 260

エピローグ 279

風狂の旅人

ある無名画家の隠された青春

プロローグ

一九八二年の秋、俺は半年ぶりでパリの古巣へ戻ろうとしていた。

乗客を呑み込んだアヒルのような機体が大地を蹴つてもう二時間、機窓に顔を押しつけて下界を覗きつづけたままだ。誰の顔も見たくない、声もききたくなかった。年に数度は訪れる鬱に見舞われていたのだ。

子供の頃から俺は躁鬱が激しい。躁のときは木の根一本で断崖に吊るさがあったり、梅雨で溢れた多摩川の濁流に飛び込んだりと、奇行をやらかす。鬱になると、閉めきった部屋に一日中こもりつづけた。

鬱はきまって黒い翳を宿した瘦せぎすの男と共にやってくる。ヴィジョンが鬱を先導してくるのか、落ち込むから翳の男は浮かんでくるのか、ともかく、そいつが俺を偏屈にする疫病神なのだ。

奴のまなざしは青白く燃え、怨嗟の光をこちらに射込んでくる。静まりかえった瞳には、死の不気

味ささえ漂っていた。その男がどこからやってくるかは子供のころから知っている。そいつは家にある掛軸の中に描かれている男だった。奴のことを、俺はひそかに「巡礼乞食」と呼んでいた。

その男の絵は、まだ人生を夢見がちな十九歳の青年によつて描かれている。残された写真を見ると、青年は秀でた額の下に澄んだ瞳を持つ色白の痩身である。彼は、何を感じてこんな不気味な絵を描いたのだろうか？

その青年が、後に俺の父親となつた十久一であつた。

画家としては無名だから、宮本十久一の名を世間は知らない。彼の絵も売れたためしはなかった。職業が収入で定まるものなら、だから十久一は画家とは呼べない。彼のなりわいは小学校の教員であつた。

ところが、当の本人は教員は仮の職業、自分は画家だという信念を生涯変えようとはしていない。それも、並外れに優れた天稟の画才を持つというおそろしいまでの自負とともにである。人は生まれながらにして定められた天職を持つと信じていたわけだ。

見合いで十久一に嫁いできた母は、新婚当初から甘い夢など見させられることもなかった。老父母のいる薄給生活を女中のように賄われ、借家を転々とさせられながら五人の息子を生み育てる。俺はその次男坊である。

しばしばの転居は、十久一が勤める学校当局と衝突し、そのたびに他校へ転任させられたからであつた。原因は、弱い者とみればみさかいなく肩入れするためで、部落の子、朝鮮人、はては差別される寡婦の同僚女教師までと、数え上げたらかきりがない。少年じみた正義感のつけはすべて母に回つ

ている。母は、四六時中ためいきをつき愚痴った。

だが、俺はそんな十久一の性格が嫌いではなかった。いや、子供のころからわがことのように好きでさえあった。

心底嫌いだったのは、貧しい教員の生活だ。俗物でもいい、父親が金持ちだったらとさえ考えたりした。中学生になると、その貧乏生活から逃れることばかりを考えはじめている。

俺の職業はフォトレポーターまがいの自由業、貧乏神とは今も一緒だ。自由と言えば聞こえはいいが、飢えて野垂れ死にするだけが自由。何一つの保証も無い生活だから、教員などよりはるかに始末が悪い。

教えるという事には偏見も持つてもいる。教育というものに効果があるなら、こんな悪党だらけの世の中になるはずがないと思うからだ。

社会に出た俺の最初の仕事は自由業ではなかった。もともと、それが仕事と呼ばればの話だ。

十久一の顔を立て、席を置いただけでろくに通いもしなかった美術学校を卒業すると、海の上を飛ぶ生活をしている。通いだしたのは、小型機が一機だけのちっぽけな航空会社だった。空を飛ぶことが占領軍に許されたばかりの時代で、飛びたい一心の海軍の生き残りたちが経営していた。

絵だけを描け、と言う十久一に内緒で四年間も通ったのは、少年時代に戦闘機乗りに憧れていたからだ。戦時中は、鬼畜米英を叩きのめすことだけを夢見ていた。敗戦後は、英語はけっして話すまいと決めた、学校と勉強の大嫌いな軍国少年であった。

発端は場末の一杯呑み屋屋から始まっている。客に絡んでいた四人のヤクザが友人までも殴った。その筋の者四人を一人で相手にするのはヤバイ。そのくらいの知恵はもうあった。だが性格は変えられない。

「俺が相手だ！」

勝手に口から生意気なせりふが漏れ、表へ先に飛び出している。一人ずつしか出られない出口に構え、殴って投げ、投げて蹴倒し、警官と友人の兄が駆けつけたときは、四人を地上にのばしていた。ことわっておくが、喧嘩にいつでも勝っていたわけではない。こっちも顔が真つ赤なら、相手もかなり酔っていた。

お決まりの飲み直しとなり、殴られた友人の兄が元予科練だったことを知った。

「いっぺん空を飛んでみたい」

そう言つて空から魚の群れを捜すちっぽけな飛行会社に紹介されたというわけだ。

一度飛んでみたいと思っただけだが、先方はパイロット志望の若者とかんちがいていた。呼び出されて飛行場に駆けつけると、蚊トンボみたいなパイパー・トライペーサーのエンジンがもう回っていた。

予科練上がりの飛行兵曹長と少年整備兵。二人のかつての部下を従えた元航空隊指令、高嶋海軍大尉は気持ちのいい奴だった。

彼らが生き残ることができたのは、連合軍の飛び石作戦のためだ。連中のゼロ戦水上機の基地が台湾にあり、連合軍は素通りして沖縄に直行したからだった。

取り残された彼らは、逝った者たちに申しわけないという思いを腹底に滲ませていた。そいつに俺

は好感をもった。

だが、当時の飛行機乗りたちは平和主義者なんかじゃない。ないどころか、戦いを正当化し、その信念こそが死んだ仲間への追悼だと疑わない奴らだ。その単細胞世界に引かれたのは、六十年代、安保闘争の高揚と挫折の後の、この世への不信と失望があつた。

パイパーはふんわりと宙に浮かぶ。快感に酔う俺のうしろで元海軍大尉が叫ぶ。

「操縦してみろ！」

俺はぐいと操縦桿を手前に引く張る。宙返りだ。奴があわてて叫ぶ。

「やめろ！ 空中分解する！ スタントのできる飛行機じゃあない！」

地上に舞い降りると、今度は奴はポツツリと言う。

「俺たちと飛ばんか」

ドスをちらつかせる組員どもが俺を追い回しはじめていた。飛行場にはまだ米軍がいた。ゲートの中までは奴らも追つてはこれない。俺は二つ返事で広々としたフィールドに通いだしている。

油にまみれた作業の先に新しい世界が開かれてるように思えた。飛ぶことには性的興奮もあつた。飛び上がるのを待つあいだは出撃を待つ搭乗員の気分になる。死の約束された若者たちの気分芝生に寝転び、いっぱし顔で流れ去る雲を眺めた。

飛ぶだけで満足するほんほんとでも思われたのか、最初の一年間は無給だった。もつとも、相手は支払う金を持つてはいなかったのだ。洋上飛行に慣れ、なにがしかをもらいだした三年目、長屋（飛行場の小型機だけの小会社の集まったプレハブ）の仲間から四人目の犠牲者が出る。特攻に出撃、敵

艦隊を見失って帰投したため敗戦を迎えることのできたその男の死は、郷里の上空での墜落であった。新築した彼の家の表札を、俺が彫ってやったばかりの頃だ。

空を飛んでいることが十久一にばれたのも、食えもしない俺が初恋の女と結婚したのもその頃だった。

「お前はまだ馬鹿なことを考えているのか！」

絵を描いていると思っていた十久一は顔色を変えた。特攻隊員になると言っていた子供の頃の俺を思いだしたにちがいない。

「単なる運転士になんぞなっとうする気だ。才能を無駄にしないで絵を描け！」

洋上の魚群を捜すだけで、宙返りも撃墜もやれるわけでもないフライトに飽きだしていた。理由は他にもあった。軍隊組織が内蔵する特有のいじめにもあっていた。だが元海軍大尉にその弱音は吐けない。「単なる運転士」といった十久一のせりふを潮に、ライセンスを取ることをあきらめ、やがて連中に別れを告げる。「辞める」といった俺に、絵を描くのならと元大尉は涙を浮かべた。そいつが胸にジーンときた。その俺を冷笑するもう一人の自分がいた。

だが、地上に戻っても俺はやはり絵を描こうとはしなかった。「何のために描くのだ？」と思っていたのだ。

自己顕示欲の塊のような連中の集まる画壇などにはかかわりたくもなかった。十久一を通して子供の頃から芸術家を自称する連中を見てきていた。奴らの大半は口先だけの二重人格者だ。戦時体制下で、彼らの多くが何をしていたかも知っていた。

金や体制は勿論、誰のためにも絵は描くものかと思った。おのれの命を燃えたぎらせ、体内から湧き上がる、「描きたい！」と思う日のくるのをまつのだと思った。

つまり、俺もまた十久一と同じように、おのれの才能に対する滑稽なまでの自負をもっていたことになる。そして、才能が時とともにすりへっていくことには気づいてもいなかった。

「詩で革命を起すことができないなら、詩を書く意味などどこにある！」

ヴェルレーヌに向かってそう叫び、アフリカに去ったアルチュール・ランボーを気取っていたのか？

俺はまだいやになるほど若く、あらゆることを可能だと信じるノーテンキな若造であった。

その頃、写真を撮れば海外に飛びだせるらしいことを聞きこむ。海外に憧れていた俺は、二カ月ほど友人の暗室に潜りこみ、数冊の本を読んだだけでカメラマンを自称した。出版物のカラー化が始まりだした時代だったからなのか、それまでシャッターを切ったこともなかった俺の写真が出版界に通用した。海外に飛びだしたい一心の俺に、中南米移動契約特派員の口がかかってきたのは、仕事を始めてから一年後だった。声楽をしていた新妻は「私達の生活はどうなるの？」と泣いたが、俺は振り切るように旅に出た。

以来、片足のつもりで入ったこの世界に今では肩までとつぷりと浸かり、俺はまもなく初老を迎えようとしている。二十五年間にもなろうとする、しかし単なる放浪に過ぎなかった旅の日々。その生活を、俺もまた十久一と同じように仮のものだと思いつづけていたのだった。

だが十久一と俺との間には決定的なちがひがある。これこそがやりたいというもの、俺ははまだ

に持つていないということだ。

いや、その言い方は正確ではない。この世を生きてゆくための、どんな仕事や職業をも不純とする、奇妙な自己否定が俺の中に巣くつている。世のなりわいを俗事とし、社会を俗なもの決めつける考えの根には、世の中の価値が一八〇度の変化をした時代に少年期を過ごした屈折もある。だが、それは大戦直後のすべての青少年のもので、俺だけに特別ではない。俺の屈折には、それに加えて例の黒い翳のヴィジョンが絡んでいる。物事を突然切り捨てつづけてきた人生。その腹の底に巡礼乞食の姿があった。今頃になって、俺はそのことにやっと気づきはじめていた。

うとましいその巡礼乞食を描いた十久一のほうは八十一歳の老いを迎えていた。

木枯らしの吹く日、十久一は胃ガン末期の宣告を受ける。

老体に患部切除は無意味という病院の医師団に、万が一の再起もあるならと十久一は手術を切望した。

「俺にはやり残ししまった仕事がある」

そのせりふだけを繰り返していた。生きることへの異常なまでの執着をみせ、ついに手術を乗り切ってもいた。医師団もその頑固さがたまらなかつたのか、それとも余命の残り少ないことを知つてのことか、病院は完全看護が建前にもかかわらず、四六時中の家族の付き添いを求めてきた。母と五人の息子、その妻たちまでがその分担をする羽目となる。各家庭の生活は、崩壊寸前といった状態に追い込まれていた。

折よく飛び込んで来た取材を口実に、俺はそのやりきれない現実を逃れるようにパリへと向かつていたのだ。

看護の分担は逃れても、だが黒い翳は機上までつきまとっている。
その疫病神が、十久一の執着する「やり残しちまったこと」に深く係わりあっていたことを、俺は
まだ何一つ気づいてはいない。

第一章 圧縮された寒気の中の旅

アヴェニュー・デ・ゴブラン ビス十番地。エレヴェーターなしの七階の屋根裏部屋に辿りつき、俺はベッドに崩れこむ。疲労からの風邪か？ 三八度を超える高熱に見舞われていた。

素っ裸にバスタオルを巻き、毛布を頭からかぶって、唸り、吼え、発汗を三度繰り返すのが子供のときからの俺の風邪の治療法だ。空腹で目覚めると熱はひいていて、二十四時間が経過していた。階段を駆け降り、街角の馴染みのカフェに飛び込むと、ハムのバケットと苦いエスプレッソのドゥブレを胃に流しこんだ。一息つくひまもなく、タルボをガレージから引きだす。危うくシベリヤ送りになるところだったポーランドの旅とともにしたポンコツ車だ。階段を二度も上下し、六〇キロを超える機材を車に積み込み終えたと、汗が肌をひいた。

やっと発火したエンジンもじょじょに機嫌を直しはじめる。北欧、東欧諸国からサハラ砂漠まで、四年間をとともに走った奴。使い古されたポンコツ車に、俺は愛着さえ抱き始めてる。その反対に、人